

巨理町地域おこし協力隊
本城祐哉
2024年度 活動報告



フィジカルシアターユニットCeremotion旗揚げ東北ツアー『あなのなかの』より

本城祐哉

1996年生まれ 兵庫県出身
ダンサー、振付師、音楽家、俳優



(撮影 松本真依)

ミュージカル俳優ジーン・ケリーに憧れ、4才からクラシックバレエ、6才でジャズダンスとタップダンスを始める。

県立宝塚北高等学校演劇科28回生。卒業公演の音楽劇では振付チームのチーフを務め、その舞踊研究の中でエンターテイメント以外のダンスの可能性を求めコンテンポラリーダンスを始める。

2015年 Joffrey Ballet School jazz&contemporary summer intensive にスカラシップ100%で参加。アートとエンターテイメントのハイブリッドのようなアメリカンスタイルのダンスを学ぶ。この頃から、自身でも振付をはじめ。

2016年から、世界的振付家島崎徹氏の作品に参加し、台湾や横浜で上演を行う。

2017年、京都を拠点に活動するアーティスト集団幻灯劇場に入団。以降、文化庁文化交流事業の大韓民国演劇祭参加作品であり現地誌にて「沈黙のサーカス」と評された『56db』でのダンスシーンや、未来の日本を描いた『0番地』では絶滅していく架空の民族の伝統舞踊の振付など、ダンサー、振付師、俳優として国内外多数の作品に参加。また同劇団では劇中歌などの作曲も務める。

2018年 Festival Tokyo オープニングプログラム ピッチェ・クランチェン振付・演出『MI(X)G』に出演。南池袋公園にてゲリラ的に行われた同作品で公園内外にいた観衆を作品内に取り込むマイクパフォーマンスなどの大役を果たした。ウクライナにて、ウラジミール・マラーホフ氏主催のガラコンサートで島崎徹氏振付作品に出演。世界各国のトップダンサーから高い評価を受ける。

2019年 自身の作品『react』で、横浜ダンスコンペティション コンペティションII ファイナリストに選出。

2022年1月より宮城県亶理町に移住し、舞踊の持つ「祈り」についての研究を始め、

2022年5月 自主公演『you,phantom』

2022年6月 INDEPENDENT:SND22 『phantom party』

2022年12月 本城祐哉×幻灯劇場『虎と娘』

2023年11月 自主公演『波書』

などの作品を宮城県を中心に精力的に自作品を発表。

2024年度の活動目的

文化芸術に触れる機会を増やす。体験すること、鑑賞、感激することの両軸で進めていく。

東北で活動するクリエイターと結成したユニットCeremotionによる、亘理公演を千秋楽とする東北ツアーの実施。今後本城祐哉というクリエイターが東北で活動していく礎にもなる企画である。

亘理公演において、一般公募で募った町内外の参加者とワークショップを通して劇中の1シーンを創作し、亘理公演の上演で実際の舞台で共演する。地方では特に機会の少ない「表現する」体験を企画することで、興味があるのにやりたくてもできない、できなかった層に舞台芸術に触れてもらう。この経験が参加者及びその周囲の人々の文化への理解、関心を高めていくことで、芸術とともに豊かな町作りへの一歩となることを期待する。

映像作品をコンスタントに発表することで親しみやすい媒体やコンテンツを通して文化芸術と亘理町の魅力を発信していく。

オリジナル楽曲とその楽曲を使った映像作品を月に一回のペースを目標にして発表する。映像の撮影は全て亘理町内の各所で行う。

2024年度の活動報告

フィジカルシアターユニット”Ceremotion”結成

ユニットプロフィール

2023年9月～11月、東北ツアー『あなのなかの』で旗揚げ。

ユニット名の「Ceremotion」は「ceremony」＋「(e)motion」の造語であり、人間の持つ祈りや願いを身体を通して表現するというユニットのコンセプトを表している。

宮城県亘理町地域おこし協力隊として2022年より兵庫県から同町に移住したダンサー・音楽家本城祐哉、青森県出身で現在は仙台市を中心に活動する脚本家x梨ライヒ、山形県で活動する劇団MOYUの演出家鈴木啓史の3人が発起人となり立ち上げられた。

セリフが少なく、ダンスやマイムなどの身体表現や音楽、小道具、映像など様々な要素を用いてシーンを作り上げる新しい総合舞台芸術であるフィジカルシアターの手法を用い、それぞれの分野から舞台の解釈の間口を広げる。



2023/11/22 大石田AIR公演『源～ MINAMOTO～』

参加作品『My、米、舞い、運ぶ』より

アルバム



巨理公演 事前ワークショップ

10月から11月公演にかけて計4回の事前ワークショップを実施。

このワークショップ企画は、約3年間巨理町で活動する中で本城自身が感じた、目には見えない潜在的な文化芸術に対する関心を舞台上で表現するフェーズにまで引き上げることを目的としている。ただ観劇、鑑賞するだけではなく、実際にものづくりの現場を経験し舞台に立つ体験は参加者の記憶に強烈な印象を与え、今後の芸術への関心や態度を変えるものになる。

参加者は町内外合わせて8名。参加者の経験、年齢を問わないメソッドを使ったワークショップを通して、ステージに向けて作中の新たなシーンを創り上げた。



ワークショップの様子



巨理公演集合写真

音楽活動

オリジナル楽曲、映像制作



Improvisation #1

撮影場所
郷土資料館 展示室

ゲストダンサー
村上亮太郎



トンネル

撮影場所
吉田地区交流センター 外

客演
佐藤隆太、志賀アラン、藤
崎友心



One More Dive

撮影場所
鳥の海公演バスケットコート

ゲストダンサー
村上亮太郎



砂の城

撮影場所

JR巨理駅連絡橋

岩村寛人作「quiet sand」



落ちる中で

撮影場所

阿武隈川河口付近

イベント出演など



- 8/15 わたりふるさと夏祭り ステージ出演
- 9/8 Toriton Surf Cup ライブ出演
- 9/28 東北芸術花火 ステージ振付・出演
- 10/3 亘理中学校PTA行事 企画・実施
- 10/8 亘理小学校PTA行事 企画・実施
- 12/10,20 Mustache Burger 主催パーティー ライブ・DJ出演

2024年、振り返り

3年目となった、2024年度は音楽家としてのキャリアの始まりの年でもあった。音楽というジャンルは広く世間に受け入れられる素地ができており、様々なイベントへの出演依頼が来るなど、舞台芸術に触れたことがない人にも受け入れられやすいジャンルだと感じた。

昨年から継続して夏祭りなどの各種イベントや学校PTA行事などへ参加できたことは本城祐哉という芸術家と、芸術そのものが亘理町に波及していくことを実感できるものであった。

また今年は東北を中心に活動するユニットを立ち上げ、亘理公演を最終上演会場に含む東北ツアーの実施が活動のハイライトであった。各公演地で目標動員を達成し、亘理公演も全上演会場で最も多くの動員を町内外から獲得した。事前ワークショップでも町内外からの参加者との共演により、文化芸術への関心、その敷居を下げることに寄与した。

今後の展望

3年間の任期を終えて、この度亘理町への定住を決めました。東北の演劇人たちと交流しユニットまで立ち上げることになりました。

3年間、地方と呼ばれるまちで暮らして感じたのは、潜在的に芸術に興味がある人口がまだたくさんいるということです。芸術を体験したい、経験したい、見たい触れたい、しかしその手段に乏しいが故に叶わない、そんな見えない芸術への関心に触れることができました。

当ユニットは舞台芸術活動での活躍を目指すとともに、東北地方の潜在的に芸術に関心のある人々を舞台の上、スポットライトの下に立ち上がらせるための活動も始めていく予定です。それは舞台芸術を生業とする我々にとって自主公演だけでは収益が望めない日本の舞台業界において、いわば真つ当なビジネスとなり得る事業でもあります。

個人の活動はもちろん、地方の人々と創り上げる舞台芸術事業を東北で立ち上げることが今後の命題と考えます。